

戦史部の回想

元戦史編さん官 近藤 新治

戦争が終わった時、私は稲毛地区に待機する戦車師団の中隊長であった。そしてその年の暮れには、復員局残務整理部で毎日死亡広報の整理をしながら、「米国の対日戦史調査に協力」という任務を命ぜられていた。毎日任務につきながら思うことは、「全身全霊を打ち込んでいた戦争になぜ負けたのか、その原因は何だったのか！」ということであった。何としてもそれを解明したいと思い、元の連隊長のところに相談に行った。連隊長はしばらく考えた後、「その問題に答えられる人が一人だけいる。原四郎を紹介しよう。今、復員省で資料整理課長という名目で、戦史資料を集めているからちょうどいいだろう」と言われた。連隊長の紹介状を手に恐る恐る原さんを訪ねた。それから毎月一回原さんを訪ね、民間人の趣味的研究からプロとしての戦史研究者になるまで、その道すじを示して導いていただいた。

昭和 41(1966)年 3 月、私は陸幕第五部機甲科班の先任から、防衛研修所の戦史編さん官を命ぜられ異動した。終戦時からの思いを解明するため、全力を傾ける仕事につくことができたのだ。

当時、原さんも戦史室入りして常勤されていたので心強かった。その他、陸上班には班長島貫武治(参謀本部作戦課)を始め、不破博(ビルマ方面軍参謀)、稲葉正夫(陸軍省軍事課)ら十人を超える編さん官がいた。

西浦進戦史室長とは、着任の挨拶で初めてお会いした。部屋の入口で頭を下げると西浦室長は仕事の手を止め、新任の私に立ち上がって近づくと、手を握った。「お待ちしていました。」とソフトな声で言われた。この時の心のこもった挨拶は今も忘れられない。西浦室長は一切の細かいことは言われない。いちいち手をとって教えなければわからないというような奴は、戦史室には必要ないということであろう。西浦室長は多忙に加えて来客も多く、勤務時間内には話せないのも、たびたび退庁時の自動車の助手席に乗り込み、貴重な話を伺った。

私にはこの室長の助手席と同じくもう一つの楽しみがあった。陸上班の昼休み、ストーブを囲んだ先輩たちとの雑談だ。この内容がすごい。活字にならない話が次々と飛び出す。人物月旦から、諜報謀略の裏話、失敗談が出る。私はそれらの貴重な話を大学ノートに整理することにした。もちろん記すのは解散後にこっそりとである。

戦史室陸上班での任務は、南太平洋陸軍作戦(ラバウル・ソロモン・ニューギニア)を開戦から終戦まで五巻の公刊戦史としてまとめるということであった。南太平洋の戦局を

総ざらいして全体像をつかみ、目次構成を考える。その作業に四苦八苦している私に、原さんが横からスラスラと問題を解決してくださった。そして、「近藤くん、ここを切ったら何が出ますか」と左手首の動脈のところをスッと右手で切る真似をした。「サア、血が出ますか」と私。「われわれは、戦史がタラタラ出るようにならなければだめなんです」と笑いながら言われた。私は参ったと思った。

各幹部学校への戦争指導・作戦指導の講義は、西浦・島貫・原それと海軍の角田求士らの先輩方が出向していたが、私は鞆持ちとしてお供し聴講した。原さんの「大東亜戦争指導史」の講義は三年連続で聞かせていただいた。原さんが病気治療中の講義を私に代行させてくださったということは、私の手の切り口から戦史がしたたとみとめてくださったのかと嬉しく思う。

昭和 50(1975)年 5 月、担当する戦史叢書『南太平洋陸軍作戦<5>』が刊行された。一区切りついたと思った時、戦史室長からスウェーデンのストックホルムに本部のある国際軍事史学会が、イランの首都テヘランで年次大会を開くので参加するようにと命じられた。出席し、将来戦史室は諸外国の戦史を独自の立場で研究すべきかどうかを検討するように、ということだった。

昭和 51(1976)年 7 月 6 日から 16 日までテヘラン会議に参加した。そのとき私は、参加した二十カ国の発表テーマを見て、その古い時代に驚かされた。日本の軍事史研究は大東亜戦争に囚われて真の意味での“歴史研究”ではないのではないか？、全ての発表を聞き終えて、「日本は偏っている」と強く感じた。

従来の研究で不明であった歴史のある部分を、関係各国の史資料をスライドのように何枚か重ね合わせることによって、一枚の面を作り出す。この手法で国際関係軍事史像をあぶり出していきたい。テヘラン会議からの帰途、私はそんなことを考えていた。

思い返すとずいぶん長い間、「戦史研究」に従事させていただいた。「戦史叢書」五巻をはじめ何冊かの本を書いた。「なぜあの戦争に負けたのか」の答えは、私の上梓した本の中にあると考えている。